

昭和四十二年三月

第二次日向遺跡総合調査

第二・三輯

宮崎県教育委員会

昭和四十二年三月

第二次日向遺跡総合調査 第二・三輯

宮崎県教育委員会

延岡市貝ノ畠遺跡調査

一、序　言

延岡市貝ノ畠遺跡調査は第二次日向遺跡総合調査の第二年度として実施したもので、今回の調査は延岡市上舞野字苅田の須恵窯址と同市貝ノ畠の弥生期住居址を発掘することとした。上舞野の須恵窯址は、去る昭和十五年ごろ現官崎大学芸術部教授（音楽）曾根賛氏が発見したものであるが、未調査のまま残されていたものであり、弥生期の住居址は前年度の都城市年見川流域の弥生期の住居址調査と比較研究する意味で、開発による破壊寸前の遺跡を記録保存するため延岡市内の適地を選んで行うこととなつたもので、県教育委員会では昭和十四年一月二十六日県教育専門社会教育課主事黒木清三郎、県文化財専門委員石川恒太郎を派遣して予備調査を行ない、発掘地点を定め、諸種の手続を完了して同年三月七日から同月十四日まで発掘調査を行なつた。調査員は県文化財専門委員石川恒太郎、同日高正晴、九州大学助手小山富士雄、県立博物館学芸員栗原厚文蔵、県教育専門社会教育課黒木清三郎で地元の甲斐常美主事および九州大学大学院学生二名が参加した。

二、調査の経過

1、予備調査

昭和四十一年二月二十六日午前七時四五分官崎駅発の急行フェニックス号で延岡に行き市教育委員会で自動車で来た黒木清三郎氏と落ち

合い、教育委員会と打合せて甲斐常美主事と三人で同市上舞野に行つた。前にこの窯址の発見者である曾根賛氏に照会して同所の松田留吉氏が窯址の所在を知つておられた旨の報告を得ていたので、松田氏を訪ねたところが幸いになお健在で、その場所を教えてくれた。それは部落の東方の谷を北に走んだ字苅田の道路沿いのところで、新らしく開かれている道路から岐れた旧道を一〇mばかり上ったところで、この下の道路を距てて水田に面したところにも窯址があるようである。それで窯址の所在を確かめたので、部落に引き返し土地の所有者等について発掘の承諾を受け、さらに下舞野に向つた。

下舞野の丘地は石器や土器の散布の多いところであり、さらに野地の畠地に弥生期の包含層があったことを思い出したので、この両地のうち何れかに発掘地を定めるため下舞野に向つたわけであるが、この丘地に射的場やゴルフ場が出来、また園芸場や人家も建ち次第に遺跡が壊れようとしているので、この調査も急がれるわけである。それでこの丘地を広く歩き廻つた後、萬千穂への道路で切断されている南方の貝ノ畠の丘地に行つたが、土器の破片が多いのと、石器を一本発見したことからここを調査地と定め、地主に会つて調査の承諾を得たが、前に聞いたとき土器が多く出たという話を聞き、ますます有望な地点と感じた。

ついで野地に廻つたが、昔で二十余年前に見た時とは土地の様子が全然違つており、畠は幾ついたが家が建ちつつあり、ここも試掘する必要を感じたが今回貝ノ畠を調査することが先ず必要と考えた次第である。かくて調査を終り、午後五時延岡駅発の急行青島で帰宮し

た。

2. 本 調 査

官崎四十一年三月七日午前十一時発延岡に向い同日午後二時半延岡市埋立の旅館喜寿に到着、黒木清三郎主事と一緒であった。先着の日高正晴、栗原文藏両氏とともに現地に行つたが、市の甲斐常美主事も来て、ここで発掘の打合せを行つて旅館に帰つた。この日は暴風雨で雷鳴もあつたが後止んだ。

三月八日午前八時出發現地に行く。労務者一〇名（女子）市教育長高森文夫氏、甲斐主事ら來会、鍛入式を行ひ發掘開始、まず丘地の中央に南北に長一五m、巾二mのトレンチを設け、南より長三mずつに五区に分け、これをA地区第一トレンチとした。そして南から一区、二区、三区と呼ぶことにした。深さ（地表下）三五cmで黄色（ローム）土層に達したが、第二区西北隅に黒色の土が入つてゐる所があり、それは西方の区外に延びていた。それで第二区を西に二m拡張した結果、黒色土の侵入している部分は長さ一m、巾東端で一m西端は湾曲して砲弾形のものとなつた。ついで第三区、第四区を西方にそれぞれ二mずつ拡張したが住居址には当らなかつた。それで黒い土の侵入している部分を掘つたが、深さ一m三四cmで地盤に達した。そしてその中から土壘の小さい破片と刷石一個を発掘した。これは下に黒土層があるので少し掘り通きたが、明らかに土礫墓と思われる。この土壘の中心線は東北より西南に方位している。昼食の時間を利用して附近の貝ノ畠字堂ノ馬場という所に五輪塔約二〇〇基があるのを見た。享禄、天文、慶長、享保などの銘文のあるものが多かつた。この夕九日の小田氏到着。

三月九日、快晴、午前八時宿を出て途中上舞野の墓址を見て現地に行く。昨日の場所は一度開墾した所であったので、今日は第一トレンチの北方約三〇mの全然開墾されていない場所に、第一トレンチと直

角に東西に長さ二一m、巾一mの第二トレンチを設定、これも三mずつ七区に分け、西から一区、二区と呼ぶことにした。しかし今日の場所は竹木の根を握るので時間の多く費やした。午後より小田氏を主とする班を分け窯址を発掘することとし、人夫は現地で三名を雇い小田、栗原、黒木、甲斐の諸氏が窯址に向つた。これらは第二トレンチを掘り、深さ五〇cmで黄土層に達したが、遺物はほとんど出ない。しかしながら黒櫻石製の石鏡一個と半月形の細石器一個が出た。これに力を得てその附近を探し柱穴三個を得た。それで最初の柱穴をP1と仮称し、他をP2、P3、P4と仮称した。そしてP1との関連を調べるために北側に第三区を巾二m延長してこれを八区と名づけた。午後五時作業を終つた。

三月十日、快晴。午前八時宿を出て現地に行き、第一トレンチの第八区を調べたが遺物はほとんど出ない。それで第八区を東方に三m延長して、これを第九区とした。午後は丘の南側斜面の方が有望ではないかという提案もあったので、地主の承諾を得て南側の畑に長さ一五m、巾二mのトレンチを設け、これをB地区第一トレンチと呼ぶことにし、これも長さ三mずつ五区に分けた。このトレンチは東北より西南に方位したが、これも西方から一区、二区と呼ぶことにした。しかしここからは遺跡もほとんど出ない。それでトレンチ全体を北に巾二m拡張したが、何らの遺物も出ない。さらに第三区を北に二m延長して確めたが遺物と遺跡も出ないので今日はこれで打ち切ることとし、B区は埋戻し、近くの山崎建設の山崎社長が自分の山を開いたとき土器が多く出て、火を焚いた跡もあったといふ山に行ってみたが、山崎氏も木が茂つていて見当がつかないのみならず、このように木が茂つていては、発掘困難と思われたので引き揚げて帰つた。

三月十一日、曇。午前八時宿を出て現地に行く。労務者一〇名（男一人、女九名）このような発掘に当つて迷うことは禁物である。今日は第一トレンチを北方に長さ一二m、巾二m延長した。先日掘った第二トレンチ第三区の柱穴と近い区域であったからである。第二トレンチ第三区の北方に住居址がないとすれば、南にある可能性がある。この延長によって第一トレンチは三区（六区、七区、八区）増加した。ところが七・九区の境のところに粘土で固めた炉址らしいものがあるので両区の間を各一m計二m巾二m西方に拡張してこれを九区とした。この炉址らしいものは径七〇cm×八〇cmであったが確かになかつた。また柱穴一個を見いだしたが、東を向いていた。午後第一トレンチをさらに北方に六m延長した。そして午後二時初めて住居址の南側の壁に行き当つた。そして床面に当るところから打盤斧石斧を発掘し、土器破片や石器を発掘した。次にトレンチを三m北に延長して北側の壁を出し、さらに東側の壁も出した。長さ四m四方の角丸方形の堅穴住居址らしい。しかし雨が降り始め、時刻も午後五時となつたので作業を止めて宿舎に引揚げた。

三月十二日、快晴。日高正晴氏は宮崎市蓮ヶ池の横穴古墳問題で官

崎に向つた。われらは現地に向い、午前九時到着、第一トレンチを西に巾二m、長六m延長してこれを第十四、第十五区とした。すると西側の壁が出た。それで計れば長さ東西に五m一〇m、巾南北に四mの角丸長方形となるらしい。しかし北部と西部がなお一部出ていないので北に巾一m、長四m延長して第十六区とし、西に長さ六m、巾一m延長して第十七区、第十八区とした。こうして住居址の全貌を明らかにしたが、立派な形となつた。午後は床面を出したが東壁中央やや北寄りのところに小形の窓（口縁破損）その他の刷石、石鏡および土器破片などが出土した。そして一応床面を出した。小形の窓は丸底で、この住居址が弥生期後期のものであることが明らかとなつた。この日は延岡

史談会の諸氏や各報道関係者が来訪された。

三月十三日、曇。午前八時半宿を出て黒木氏と二人で現場へ行く。今日は学校参觀口で夫婦が二人だけである。それで住居址外側の柱穴を探し、大小八個を見いだした。床面の柱穴も四個みつかつた。これで発掘を終り、九次の小田氏および学生二人で測量をなした。こちらは住居址を整備し大体の仕事を終つたところで測量すれば長さ五m一〇m、巾三m八五cmの角長丸方形で、深さは昔の地表から四三cmと見られた。ついで平板測量（住居址）を終り、午後五時半作業を終了した。現地は数日残して一般市民や学生生徒に見学させるといふことであつた。

三月十四日、晴。日高正晴氏とともに現地を見て市立中央公民館に行き新聞記者団と会見して報告し、一旦旅館に帰り、一同帰路につき途中日向市、美々津、高鍋町持田、宮崎市蓮ヶ池などを見て宮崎に帰つた。

三、遺跡と遺物

1、遺跡

ここで発掘した遺跡は住居址と土壤裏であるが、まずこれらの遺跡の存在する土地の状況について説明したい。この位置は延岡市貝ノ畑部落の西方で、北東には下野の古墳群のある丘地があり、この丘地の一部が東南に延びている舌状丘地であるが、この丘は国鉄日之影線と延岡市より高千穂に至る国道新線によって切断されて独立の丘地のような形を呈している。この丘地の南方にもう一つの細長い丘地があり、その南に五ヶ瀬川が西から東に流れている。この丘地は高さ四〇mで、遺跡のあるところは北から南に低くなっている。岡の北麓の国道に「貝ノ畑」のバス停留所がある。これから南方に遺跡に登る道があり、その突き当たりに山崎建設会社の材料置き小屋があつた。

この丘地の地層は表土（三〇cm～七〇cm）の下に厚さ二〇cm内外の黄色のローム層があり、その下に厚さ四〇cm内外の黒褐色土層があり、その下に厚さ一m内外の褐色の粘土質土層があり。その下には陶器層があり、その下には阿蘇の噴出物である凝灰岩がある。従ってこの丘地は洪積台地である。それでこの台地の下層には縄文時代やさうい先土器時代の遺跡もあるらしい。われわれがさきに記した第二トレンチのP-Iと称した柱穴から掘り出した打製石器と半月状石器は、いずれも風磨石製で地層もローム層の下の黒褐色土層内であったから、それらの時代のものと考えられる。しかし期間の関係でそれらの調査を行うことができなかつたのは遺憾であった。さてここからわれわれが発掘した遺跡は住居址と土壙墓であった。そしてこの二者の位置は第一図に示す通りで、同図右方にある斜線の建物は山崎建設の材料置場であり、中央が第一トレンチ、その左の端に住居址があり、右端に近く土壙墓がある。その間隔は約二五mである。

A 住 居 址

住居址は第一図に見られるごとくほとんど正確に東西南北に方位している角丸長方形の堅穴住居址で、南北の長さ五m一〇m東西の長さは三m八五mである。深さはローム層を二三cm掘り下げるが、ローム層の表面が当時の地表であつたわけでもないから當時は三四cmぐらいたり下がるものと考えられる。また四方の床面の楚は五cm～一〇cm外側に広がっている。従つて堅穴は一〇cm～二〇cmだけ底が陥くなつていてある。床面には直径二〇cm内外の柱穴三個と直径一三cmの柱穴一個があり、いずれも深さは二〇cm内外で穴は垂直に穿たれていた。間隔は西側の二穴は二m四〇cm、南北両壁からの位置は一m二〇cmくらい西壁からの位置は一mである。東側の二穴のうち南側の穴はほぼ前に同じであるが、北側の穴は少し西南に寄つておらず、穴の形もやや小さい。しかし前に記したことく、この黄色ローム層は三

〇cm内外で甚だ薄いので床面は下の黒褐色層となつて柱穴を探すこととは困難を極めた。しかもこの穴以外になかったのである。北側の二つの柱穴の中央に直径七〇cmの炉跡があった。これは粘土、炭、などの中身で確かめられた。

床面は高くなつておらず、ローム層であるが、柱穴は圓のよう八個を発見した。大きいものもあるが床面のものより小さいものが多く、何れも床面の方向へ若干傾いているのは、これから床面の四本の柱を組み合わせた梁に斜めに構木状に柱を建てかけて屋根としたので内側に傾いているのが当然なのである。柱穴はなお多くあつたであろうが、これだけ発見したわけである。

この住居址は延岡市で発掘された最初の住居址であるが、第一図に見られるごとく、第一トレンチの諸所に柱穴があるが、この住居址の圖上右側に一番近い柱穴は北側に傾斜して掘られていたから、このトレンチの北側にこの住居址と並んで、さらに一個の住居址があることは確かであり、トレンチの南側にもあるものと思われる。このように、この台地上には少なくとも数個、多ければ十数個の住居址があり、聚落を形成していたものと考えられるのである。

B 土 壙 墓

土壙墓は、住居址の東南方向五mを距るところにあり、長さ二m、巾東端で一m、西端は湾曲して砲弾形を呈していた。そしてその中心線は東北より西南に方位している。深さは黒褐色土層に掘り込んだのではなくなつたが、黒褐色土層の上、つまり六〇cm内外であったと思うのである。土壙墓は土を掘つて屍体を葬つたもので、縄文時代からあるが、弥生時代に多い墓制で、形も長方形のほか横円形、砲弾形、方形、円形など種々あり、宮崎市池内の垂水公園では十基の土壙墓が発見されたが、そのうち砲弾形のものが一基あった。土壙墓は垂水公園で見られたごとく集団墓をなす場合が多いが、単独に存在

することもある。しかし遺骨は宮崎県のような酸性土壌では残っていないことは殆んどない。

2. 遺物

この遺跡は耕作者が開墾した際多くの土器類を掘り出して一ヶ所に埋めたということであったが、そのためか遺物は他の遺跡に比して極めて少なかった。遺物はもちろん石器と土器で、都城市年見川沿岸の遺跡からは鐵器が出ているが、ここからは発見されなかった。

A. 石器

石器は非常に少なく、第二トレンチの柱穴から発掘した黒耀石製の石鏃と半月形無石器は弥生期のものではなく、この遺跡関係の石器は住居址から発見された打製石斧一個、刷石一個と石鏃破片および土壤裏から発見された打製石斧一個、刷石一個と石鏃破片および土壤裏から発見された打製石斧一個があるだけである。弥生期の打製石斧は粗製のものが多く、このも粗製である。石鏃は予備調査のとき打製のものが一個発見されたが、住居址でも一個発見された。刷石は磨石とも書く。円形の石の両面が滑らかになっているもので、住居址にはたいていあるものである。刷石は石皿とともに穀類などを粉にする時に用いられたものと言われている。

B. 土器

土器もほとんど破片のみで大形のものはない。ただ住居址にあった竈形土器は小形だが完形に近いものであった。第三図はその復原図であるが、実物は口縁の大部を欠いている。高さ六寸、口径六寸で、底は丸底である。無文で焼きは厚手である。

この土器は住居址の東壁の中央やや北寄りに壁に接して存在したので、この住居址のもっと重要な遺物の一つである。そしてその形が

四、遺跡の学術的価値

以上に記したことなく、この遺跡は弥生時代後期（今から約一、八〇〇～一、七〇〇年）のもので、その時代の人が住んでいた家の跡である。だいたい宮崎県における弥生期の文化は未だ充分に解明されていない。しかしこれを解明するためには県下各地の多くの遺跡を発掘調査する以外にはない。住居址について言えば、縄文時代以来、住居址には堅穴住居と平地住居が多い。弥生期の住居址にもいろいろの形式があり、堅穴と平地住居に大別されるし、形は角丸方形、円形、角丸長方形などがあるが、住居の床面に石を敷いた堅石住居址もある。

われわれが県下で発掘調査した弥生期の住居址について言えば、堅穴住居は宮崎市吉村町江田原の市立橋中学校校庭にあつたものがそれで、ここで五軒分が検出されたが、これは弥生初期のもので、形は角丸方形^{註(1)}と長方形であつた。また都城市年見川流域調査で、川の北岸で発掘されたものは角丸方形の平地住居に周溝をめぐらしたものと、堅穴住居址で、川の南岸で発掘されたのは円形の堅穴住居址であった。

一般的には弥生期の堅穴住居址は角丸方形または長方形のものが多いう。そういう観点からすればこの遺跡は日向国の弥生時代の住居址の代表的なものといつて過言ではあるまい。しかも堅穴住居址がほとんど完全な姿で発掘されたことは、学界に貴重な資料を提供したものといつていいことができる。

前にも述べたとく、ここにはこのほかにも数軒または十数軒の住居があつたわけで、ここに弥生後期の聚落があったのである。それは

この住居址の年代をもつとも端的に示すものである。すなわちこの壺は弥生時代後期のものである。従ってこの住居址は弥生時代後期のものであることが知られる。

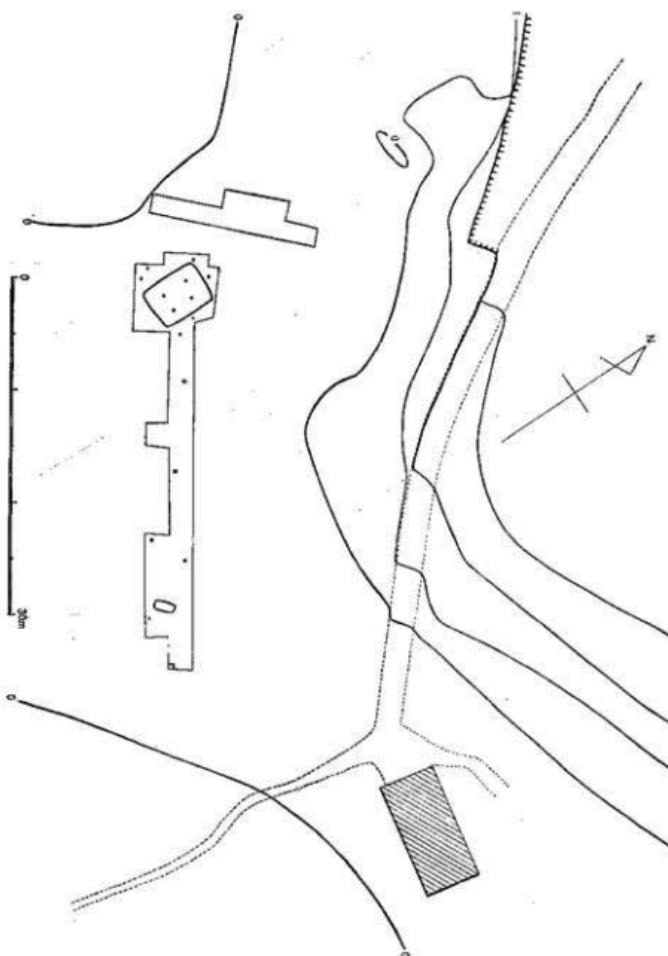
この丘地の東側にも南側にも、また両側にも水田があり、ことに東側の谷には湧水があるが、この聚落の人びとは、この湧水を生活の重要な基盤として集まつたもので、丘地の下の水田を開いて生活していたわけである。そして人が死ねば土壙を掘って埋めたが、やがて下舞野の丘地に見える古墳時代に移る直前ごろの人びとの聚落の跡で、その中の一軒の家を掘り出したことになる。

なお上舞野の須恵窯址については、宮崎市赤江の須恵窯址とともに

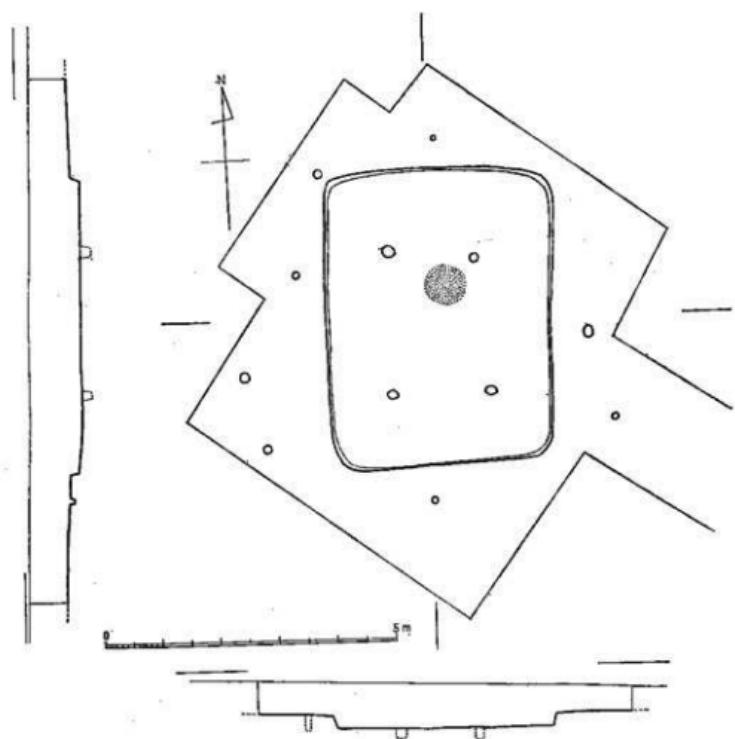
別の機会に報告する。(石川恒太郎)

註(1) 石川恒太郎「宮崎市舞野牛頭山古墳群」(宮崎県文化財調査報告書 第四編所蔵) 参照。

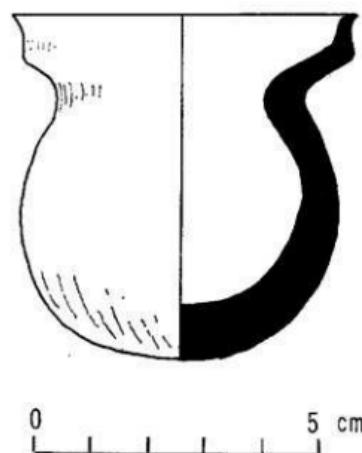
第1圖 錦糸町貝ノ畑遺跡実測図



第1図 延岡市貝ノ畠住居址実測図



第Ⅲ図 住居址にあった土器復原図



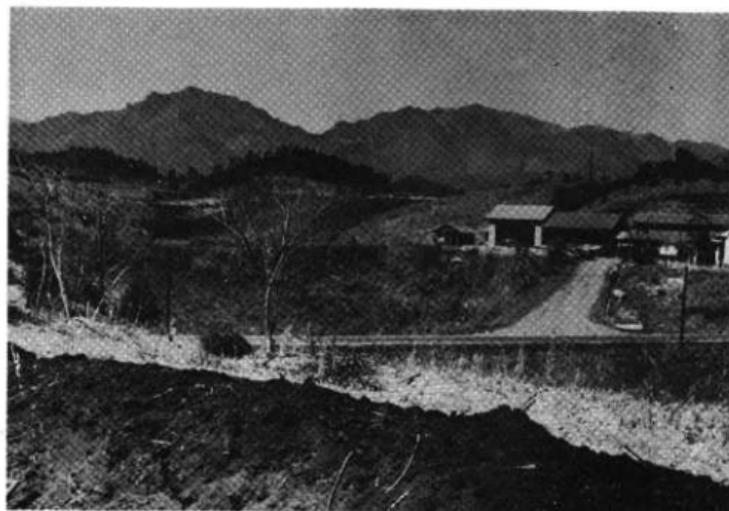


写真1 道跡より行鹽山を望む（前方の道路は高千穂国道）



写真2 住居址



写真3 堂ノ馬場の五輪塔

高鍋町持田の遺跡調査報告

一、序　言

児湯郡高鍋町持田は持田古墳群のあるところであるが、ここに古墳は昭和六年の大盗掘で、ほとんど盜掘され、その後荒れるに任されたいた。しかるに国道十号線の開通で、国道がすぐその傍を通ることとなつたので、県では觀光客の誘致の一助となすため、これらの荒れた古墳を復元することとした。そしてこの事業は昭和四十年から翌四十一年にかけて行なわれたが、古墳の封土を削り取られて圓形（きのこがた）になつた古墳や甘藷跡を彌うているものなどを埋めるために古墳と古墳の間の土を取つたところから多くの土器や石器が見いだされ、ここに弥生期の住居址があることが確認された。また京都大学名譽教授梅原末治博士は持田古墳の盗掘事件が公判に附されたとき、鑑定人であった関係から当時の事情に詳しく、且つ盜掘された遺物は京阪方面に売られたので購入者が埠上での鑑定を受けたものが多かつたことから、それらの行衛にも詳しいので、この際これらの古墳の発掘品を纏めて出版されることになり、県教育委員会と打合せを行ひ同博士監修のもとに天理大学助教授西谷真治氏が執筆されることとなつた。

住居址は一軒家西側の農道の北側（一軒屋の西隣の畠）に農道とほぼ平行に長さ一〇m、巾二mの第一トレンチを設定した。これは耕作者が、ここに焼けた土があったと言つたからである。このトレンチはほぼ東西に方位したが、西から二mきざみにA・B・C・D・Eの五区に分けた。まず表土を除いてローム層を出したが、なるほど焼けた土はあったが住居址らしいものはなかった。それで午後これと四m七〇cm間隔をおく北方に、長さ一〇m、巾二mの第二トレンチを設け、これも西からA・B・C・D・Eの五区に分けた。こうして掘つてゆくとC区で石のあるところを見つかり、その西方に堅穴住居址の床面を見つかった。しかし周囲が明瞭でないので、午後三時からA・B・Cの三区を第一トレンチまで拡張することとしたが、間もなく午後五時となつたので作業を中止して帰つた。この日採集した土器、石器は破片のみであった。

二、調査の経過

昭和四十一年七月十五日、晴。午前七時三五分発のバスにて高鍋町に行き宿舎のつるや旅館に寄り、天理大学の西谷助教授一行とともに持田に行き、午前九時二〇分より鍛入式を行なう。県教育局より守屋次長、黒木社会教育課長、寺原文化財係長、高鍋町教育長小林英義氏、同町渋谷主事、全調査員および労務者が出席して厳かに執り行なつた後二班に分れて作業を始めた。

七月十六日、晴。午前七時に早くも町の自動車が迎えに来たのでさき朝食して現場に向う。昨日に続いて第一トレンチと第一トレンチの間を拡張した。その結果住居址はほぼ全貌を出すことができた。長さ東西三m三〇cm、南北の巾一m六〇cmの長方形の柱穴であるが、南側は後世の梁の植栽で溝状に掘られていた。それで柱穴を探すことにして床面および外側の柱穴らしいところで石礫二本を発見した。帰路、台地の東北の登り口の北側取面に呪穴が見えているので、これを発掘するつもりで調べてみたが、その上が畑へ登る道路となっているので掘ることは不可能となつた。それで明日の予定を変更せねばならなくなつた。この夜安田尚義氏が来られた。

七月十七日、晴。町役場の車で現地に行く。天理大の一行は川南町その他周辺地方の古墳を見に行ったのでこちらは一人となる。まず住居址外側の柱穴を探す。ついで北側は余裕がないのでトレンチを一m拡張したが、ここでも柱穴が出ていた。このほか柱穴は南側で四個、北側で四個、東側三個で、西側は石が多い。この西側が出入口かも知れない。この住居址は地表三〇cmの地盤から床面は一三cmと一五cm下にある。午後は第二トレンチの一m延長部から北方に二m間隔をおき、北に巾二m、長さ一〇mの第三トレンチを入れたところが、溝状の長いものが二ヶ所あり、西方の溝で打製石斧一個を発見した。栗原氏は東光寺の角塔婆の拓本を取つて來た。第三トレンチを西方に三m延長することとした。

今日は延岡史談会の一行が見学に來た。また大理大の福谷氏が西谷氏を尋ねて來られた。夜黒木清三郎氏が来られ延岡市の甲斐主事の伝言（福葉崎古墳の件）を伝えられた。
七月十八日、快晴。朝食中に町の自動車が来た。一同と現場に行く。今日は一軒家の東方の牧草畠を掘ることとした。畠主の希望でまず牧草を刈り取つてもらつた。終つて南北に長さ一〇m、巾二mのトレンチを

設け、これをB地区第一トレンチと呼ぶこととした。午後はさき朝食して現場に向う。昨日に続いて第一トレンチと第一トレンチの間に土器の破片の入つてゐるものがあった。また柱穴の中に打製石斧と上器破片の入つてゐるものがあり、土器破片中に大形の圓形土器の破片も混つてゐた。午後五時作業を終つて日高氏の自動車で帰つた。

七月十九日、快晴。朝食を早目に終つて町の自動車で現地に向う。昨日のB地区の柱穴を調べ、トレンチを北に五m延長したが、やはり柱穴のみで住居址は出ない。それで延長前の北東の基点から南に長さ七m、巾二m拡張した。しかしながら柱穴は多いが住居址には当らなかつた。昼食して休んでいるとNHKの記者などが來た。午後二時ごろ県下市町村文化財担当者研修会の一行が來た。A地区で弥生期の住居址について説明し、さらに発掘現場を説明した。日高正晴氏は一行を東光寺に案内して経塚や角塔婆の説明をした。

ついでさらになつて調査を進め、柱穴から鉄器一個を発掘、続いて住居址の北側と西側の壁が出来た。それでこれを特田第一号住居址、A地区のものを第一号住居址と呼ぶこととした。そして住居址の床面から高坏脚部二個、蓋二個を発見したが、さらに町の渋谷主事に話して畠主の説解を得たうえこれを掘り上げることとした。しかしすでに午後五時となつたので遺物に手袋やビニールをかぶせて帰つた。

七月二十日、晴。昨日の畠主との交渉で南北両側に掘り上げることは構わないが、東側の甘藷畠は困るということであったので、東側を甘藷の畠の際まで掘つて止め、南側を掘る。高坏二個、深鉢形土器一個、高环脚一個、茶碗形土器二個、蓋形土器のほか打製石斧二個、石斧丁一個、刷石三箇、石錘一個その他が出た。ついで住居址の形をできるだけ出すこととし、ほぼ出すことができた。やはり角丸方形の壁で、西側の壁の長さ四m八〇cm、北側の壁は三m二〇cmでな

お甘露酒の中に入っているから五mぐらいあるものと思われる。明二十一日で作業を終り、二十二日は埋め戻すこととなつたので明日に秘てを繰り返さなければならないこととなつた。

七月二十一日、晴。現場に到り昨日に続いてB地区の住居址内の整備を行なつた。写真を撮り遺物を取り揚げ、柱穴を求めたところ床面に九つの穴が出た。床面外に五つがほぼ並んで北から西に出た。極めて複雑である。日高正晴氏、田辺大三郎氏、妻高校の旭吉法政氏、奥社会教育課の寺原係長、飯千係長らの諸氏が来られた。日高正晴氏と八十四号墳を見に行った。この保存について意見を求めるが、かくて一応調査を終えて帰つた。

三、遺跡と遺物

ここで発掘調査した遺跡は住居址のみで、第八十四号墳は義道を開いて清掃復元しただけで、これはこの他の古墳とともに梅原博士により一括して発表されるはずであるから、ここには一部の写真を掲げるだけに止める。また経緯も時間の関係で発掘することができなかつた。

1. 遺跡

発掘したのは二個の住居址であった。その位置は第一図によつて説明すれば、図中に丸いものが四ヶ所にあるのは円墳で、図の中央に斜線のある建物が一軒家である。その左(西)側にあるのが発掘のA地区で、南側のトレンチ内にあるのが第一住居址で、その北にある細長い第三トレンチ内にあるのが溝状の遺構である。また一軒家の右(東側)にある細長い鍵状のものがB地区の第一トレンチでその右端に半ば見えているのが第一号住居址である。それで第一号住居址と第二号住居址の距離は六二・五mである。

A、第一号住居址

第一号住居址は長さ三m三〇cm、巾一m六〇cmの床面をもつ角丸長

方形の堅穴住居址で、その方向はだいたい東南から西北に向いている。深さは地表下三〇cmの地盤からさらに一三cmと一五cm掘り下げて床面としている。従つて当時は三〇cm内外地表より深かつたものと考えられる。(第二圖参照)

床面に五個の柱穴があるが、だいたい二列にならんでいる。外側には北側に五個、東側に三個、南側に五個、西側には南側に近く一個あるだけで、前方両側に石があり、ここが出入口であるよう見える。柱穴は明らかでないが、床面の西南隅(右上)に近く石のあるあたりが焼けていたから或いは炉址かも知れない。形は小さいが、この家はもちろん巾一m六〇cmは住居としては少し狭いようではあるが、屋根の内側となる両側の柱穴の間隔は3mに達するのである。何れにしてもこれが家であることは間違いないから、住家でなくとも作業場または小屋であったかも知れない。この住居址からは床面と柱穴から石鎚(打製)一本を発掘した。もちろん土器の破片もあった。そしてこれらの土器は弥生式後期のものと思われるものであつた。

また第一図で見たごとく、この住居址の北側に細長い溝状のものが、この家の正面にあって、その中から打製石斧や土器の破片などが発見された。

B、第二号住居址

第一号住居址は第一号の東方六二・五mを隔つところにあり、約半形を掘り出したのであるが、同じように角丸方形の堅穴で、掘り出した長さは、第三図に見られるごとく、南北の長さ四m八〇cm、東西の長さは北側で三m二〇cm、南側で一m四〇cm、西壁から東端(最も遠い部分)までの長さ四m三〇cmでさらに床面が東方に延びているから、四m八〇cmと五mあるものと推定される。すなわち四m八〇cm内外の角丸方形の堅穴住居址である。そしてこの家の方位は、ほぼ東

西南北に向いている。深さは場所によつて違うが、だいたいローム層を二〇㌢掘り下げる床面としている。

ここ地盤は一〇㌢～五〇㌢の表土の下に一五㌢内外の黒色の土層があり、その下に一〇㌢くらいの薄い黄色のローム層があり、その下に墨褐色の土層があるが、住居址はこのローム層の下に掘り込まれてゐるのである。

柱穴は床面に九個あった。なにぶんにも全形を出してないので確言はできないが、このB地区の第一トレンチには柱穴が多く存在した。従つてこれらの穴は後世に穿られたものも相当多いものと考えられる。床面の九個の穴のうち東側の畑に接している四個のうち左側の大い二つは、西壁から距離が二三五〇㌢内外で、この家の東西の長さが五mの場合にはその中央に当る。この東にさらに二個の穴があれば床面の柱穴としては絶好のものとなる。その他の穴のうち西壁のはば中央に接している大きな穴には大きな石が落ち込んでおり、その側に深鉢があったのでこの穴は古いものと思われる。しかし柱穴とは考えられない。都城市年見川南岸の円形窓穴で、このような穴の中に臺形土器が入っていたのを思い出す。床面の外側の柱穴は一部を出で止めたが五個が発見された。なお床面のもっとも大きい柱穴は直径三四㌢、深さ三六㌢に達していた。また第三回に見られるごとく、床面には高坏、深鉢その他の土器や石器が多く遺存していた。

2. 遺物

この遺跡から発見された遺物は石器、土器および鐵器であった。以下それらの概略を記そう。

A. 石器

石器は第一号住居址から打製の石錐一本、さらにその側の溝状のものから打製石斧が発見された。またB地区の柱穴から打製石斧、第二号住居址から打製石斧二個、石庖丁一個、刷石三個、石錐一個が発見

された。これらの石器のうち石錐は、戦争にも用いられたが、普通には狩猟用の矢の根であり、この存在は弓の存在を前提とするものである。この台地の住民も、これによつて狩猟を行なつたことを知ることができる。また石錐はオモリであつて漁業の道具であるから、これによつて漁業を行なつたことが知られるが、この台地は南方は小丸川に臨み、東は太平洋に近いから漁業を行なつたことは当然である。また打製石斧は弥生期になると粗獣化することは一般的傾向で、この傾向はここにおいても見られるが、この時代には漸次石錐的な存在となつた。そしてやがて鉄器にとって代られるのである。また刷石が当時の生活に極めて必要なものであつたことは前に述べたが、ここで第二号住居址から三個の刷石が発見されたことは注目される。さらに石庖丁は弥生期の特徴的な石器であることは衆知の通りで、これによつて水稻耕作が行われたことが知られるのである。この石庖丁は長方形で孔も割り込みもないものであつた。この丘地が下に水田をめぐらしていることから考えて、この時代の人々が下の水田を耕作した人びとであることを示しているのである。

B. 土器

本遺跡より発見された土器は、その後次ぎ次ぎに発見された遺跡の調査に追われ、まだ復元の運びに至っていないので、それは別の機会に報告することとしてここにはその概略を述べるに止める。A地区で発見したものはほとんど破片であったが、B地区においては相当に多くの土器が発見された。まず第一号住居址からは「高坏」、高坏脚部三、茶碗形土器二、壺形土器二、臺形土器などが発見されB地区の第一トレンチからは大形甕の破片も発見された。

これらの土器について見るに高坏が非常に多いことが注目されるが写真でも見られるごとく脚部に透しの孔を穿った大形の美麗な高坏もある。茶碗形の土器は口が開き高台をもつ土器で、今日の茶碗に当

る。この種の代表的なものは前年（四十年十月）ここで発掘された一個で、これは高さ七cm、口径一六cm、厚さ〇・五cm、底には直径四cm、高さ〇・五cmの高台がついており、完全形で一ヶ所の欠損もない。内側は滑らかに磨きがかかっており、外側は草の葉らしいものの刷毛目がついている。腹部はやや張って実に美しい形である。この住居址から同形の土器二個を出していることは注目すべきである。蓋形土器は小さい平底で變形も同様で、これらの器形から見て弥生後期のものと見られる。

C、鉄器

鉄器はB地区の柱穴から破片が一本発見されたが、鐵錐の破片と見られる。弥生時代の後期遺跡からは、すでに都城市年見川流域から発見されており、この台地からも前年の四十年に數片が発見された。これらは鐵器はさらに今後精査する必要がある。

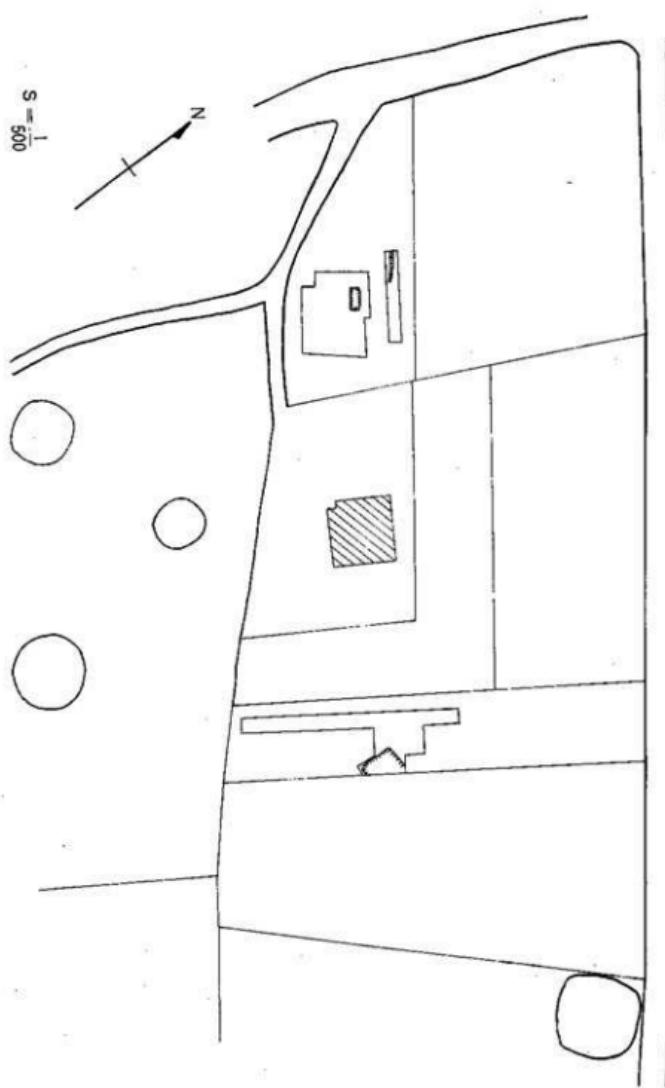
四、遺跡の學術的価値

この遺跡は弥生後期の住居址であるが、このほかさきに土取場から発見された住居址の一部もあり、これは第二号住居址の西方、一軒家にもっとも古い古墳とその南方にある古墳との中間附近で、同住居址との距離は四〇mぐらいである。この住居址は一部壊れていたが、南北の壁の長さ四m三〇mで、丸底の蓋形土器その他があった。從ってこの台地には、さらに多くの住居址があつて、延岡市の貝ノ畠丘地と同じように、弥生後期の聚落があつたわけである。

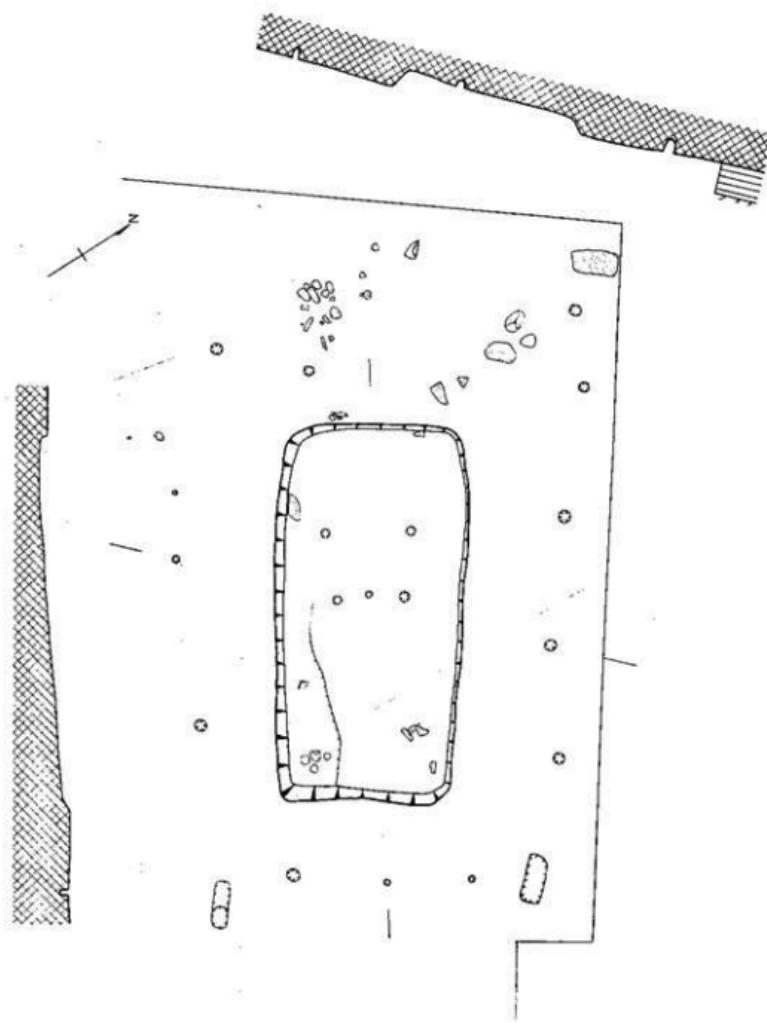
そしてこの丘地の西側の麓には湧泉があるが、この湧泉が往時の部落の人びとの飲料に供されたものであることは言うまでもない。またこの丘地の聚落の人びとが下の水田を耕やしていたことも知られるが、この丘地は小丸川の氾濫から脱がれるには絶好の居住地であったわけである。そういう意味においても延岡市貝ノ畠と同じである。このように見て來ると弥生後期の聚落の型を、われわれはここにも見出しあわ

けであるが、このことは今後の県下における弥生期の研究に大きな手掛りを与えるものである。
しかもここで掘り出された遺物のうち、特に土器には優れたものが多く、彼の大形高杯といい、また茶碗形土器といい、甚だ優品を出していることは注目すべきで、鉄器の存在とともに、極めて高い文化を持っていることは注目すべきである。今回の調査は時期的に適当ではなく、若し冬期の畑に作物のない時に発掘を実施していたらさらに大きな収穫を得たであろうと思われる。この台地もまた洪積台地であつて、さらには広く発掘すれば繩文時代および先土器時代の遺跡があるものと思われる。しかし今回の調査が県下の弥生期聚落の研究に重要な手掛りを与えたことは最も大きな収穫というべきである。（石川恒太郎）

第1図 高崎町持田遺跡附近実測図



第1図 高鍋町持田第1号住居址



第Ⅱ図 高鍋町持田第2号住居址

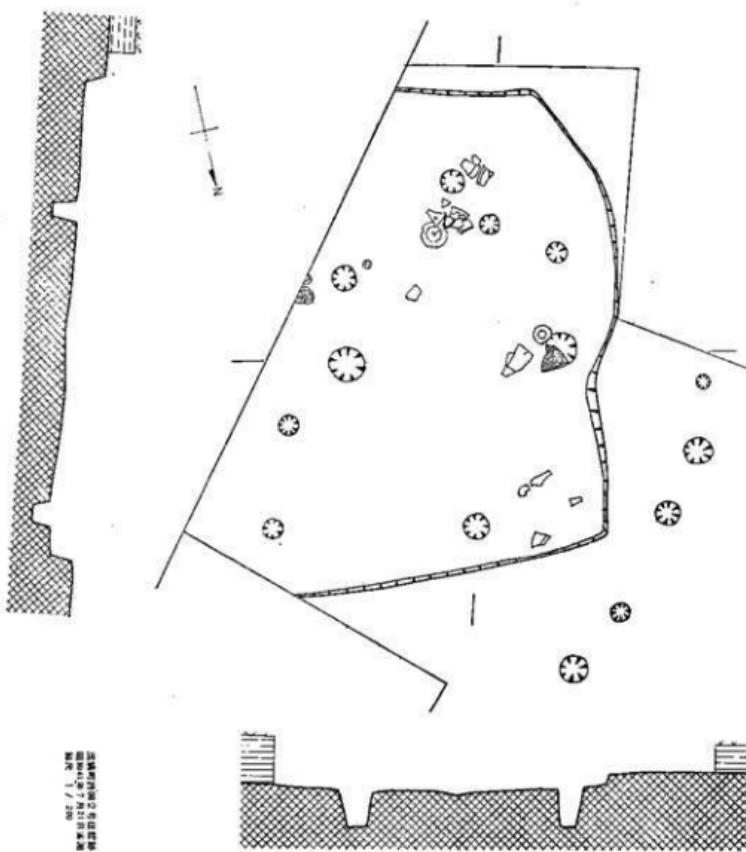




写真1 第1号住居址

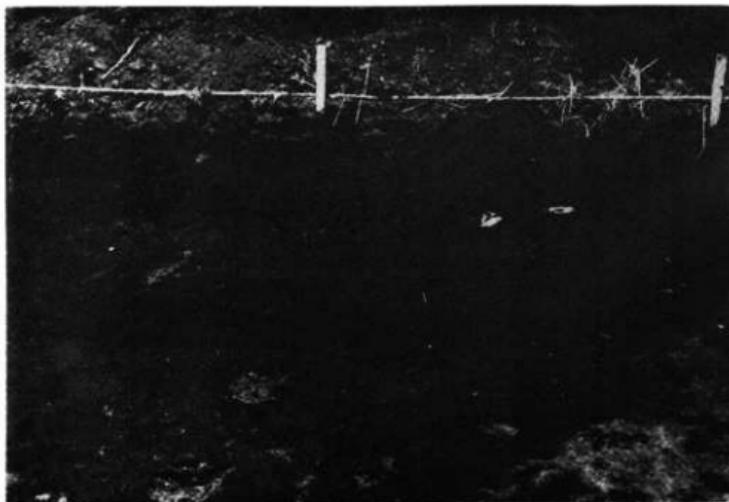


写真2 同 上



写真3 第2号住居址



写真4 第84号填埋道

写真5 住居址に高坏のある状態

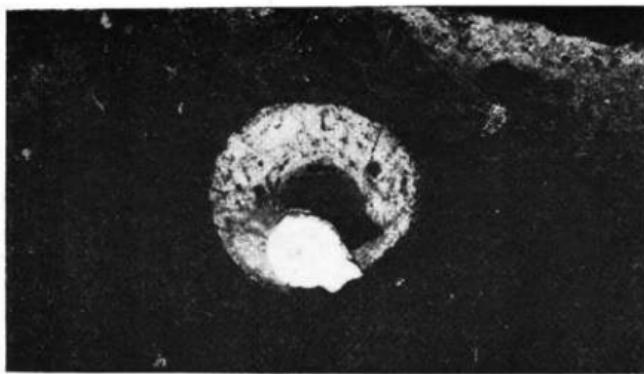


写真6 壕 高坏のある状態



写真7 同 上

